

Into my Packet



後藤滋樹の

新・社会楽

後藤滋樹
goto@goto.info.waseda.ac.jp
早稲田大学 理工学部 情報学科

第28回「幕藩体制」

現代の日本は変革の時代を迎えている。これがどのような変化をもたらすのか、現在進行中なので誰にもよく分らない。このようなときには、歴史をさかのぼって過去の変革の時代を考えてみるのも興味深い。

【産業革命か明治維新か】

今回の変化は産業革命(1770年代の英国)に似ている。むしろ産業革命が徹底的に進行するという見方がある。産業革命の時代のキーワードの1つは「分業」であった。分業が成り立つためには運輸技術が不可欠である。分業という用語は、アダム・スミス(1723-1790)の「国富論」(諸国民の富)の中で初めて使われたという。国富論の冒頭には分業の説明があり、運輸手段の分析が述べられている。

これに対して現代は通信技術である。通信によって分業がさらに進展するというのが、今回の変革を産業革命の徹底と見なす立場である。

もう1つの見方として、今回の変化を明治維新の第二波とする説に注目してみよう。というのも、現代の日本にはまだ幕藩体制が残っているように感じるからである。

【国有財産は幕府のものか】

インターネットが成功した一因として、オープンという言葉が使われる。オープンというのは、技術的な文脈では1社の製品に閉じて(クローズ)いないことを言う。

実際にインターネットは、社会的な意味でも昔からオープンであった。インターネットの骨格の部分はNSFnetと呼ばれていたネットで、1995年4月末までは米国政府の予算で運用されていた。その時代でも若干のルールを守れば、誰でも使うことができたのだ。

また研究成果についても、米国政府の援助を受けた場合には原則として公開される。子細に見れば軍事研究は非公開になっているので全部公開とは言えないが、公開するのが原則だ。ネットワークの研究がこのオープンな環境で進展したという事実も見逃せない。

これに対して、日本ではいろいろな工夫はあるものの、税金を使った成果は国のものである。国有財産管理法というのがあり、大切に扱わなくてはならないからだ。という次第で、国となった研究成果を使うのは大抵の場合には面倒らしい。

この国有というのが、よく考えてみると妙なのだ。国を構成

しているのが国民だとすると、国有とは皆の所有物ということになる。しかし、実際には管理されていて自由には使えない。

日本でも国道や橋などは国有財産でも自由に使える。あれは特別な取り決めがあるという。つまり、原則はオープンではないということだ。

ここで私は「国=幕府」と感じてしまう。幕府の物は民(たみ)の物にはあらず。

【会社の倒産はお家断絶か】

日本社会に残っている幕藩体制はほかにもある。日本では会社が倒産するのを極度に嫌う。「会社=藩」と考えているのが、まさに一大事である。世の中全体が、会社を潰さないようにしているのだから、その中で少数の会社だけが気楽に倒産するわけにはいかない。

本来は会社という組織は、もっとダイナミックに生成消滅するものらしい。古い産業分野の会社が解散すれば、そこに集まっていた有為な人材が解放される。

その人材は新しい産業分野に移っていく。倒産した会社の従業員としては、そんなにクールに振舞えないかもしれないが、社会全体の動きとしては合理的だと思う。

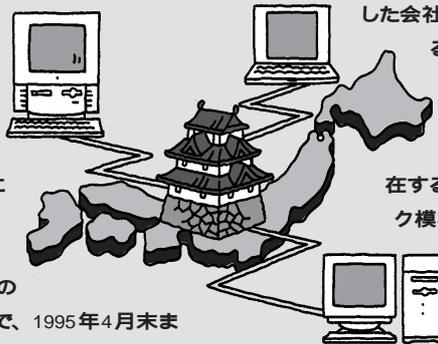
会社が藩であるとするれば、行動の規範も、成果の評価も、藩の内部に存在する。日本社会というのは、そういうモザイク模様になっているのかもしれない。その結果として、国全体の姿や意思が不鮮明になっているのだろうか。

【大久保利通の限界】

国家100年の計という言葉がある。既に明治維新から100年以上が経過している。いかに当時の計画が優れていたとしても、もう限界だ。

明治維新の立役者は大久保利通(1830-1878)で、彼が務めたのは大蔵卿、つまり大蔵大臣である。大蔵省が現代の変革の目玉になっているのは偶然ではあるまい。

さて、明治維新の第二波によって現代の幕藩体制は変わるのであろうか。この結果は予測できないのでお楽しみということになるが、歴史の変化点に立ち会えるのは幸運である。ありがたいことには、100年前と違って刀を振り回す必要がない。命は大切に、この変化の時代をエンジョイしたいものだ。





[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp